

私の読書日記

H. 44

人工内耳、性的満足の歴史、世界の奇妙さとキリスト教論

ノンフィクション作家

立花 隆



×月×日

森満保『どうして子供は勉強しないといけないの』

(文光堂 2800円+税)

は、副題に「人工内耳から分かったその理由」とある。人工内耳の専門家が、脳の発達過程と聴覚の発達過程の深い深い相互作用の分析から導いた、説得力あふれる説明。

子供時代に、ある領域の勉強を全くしなくなると、そのことを勉強するために大脳に準備されていた脳細胞の軸索や樹状突起が次第に細くなって、遂には消えてしまう恐れがある。そうなる大脳のサイズが大きくなっても、すでに神経回路網が切れてしまっているので「勉強をすること自体が不可能になってしまう」

だ。私は前に人工内耳についてTV番組を作った経験から、ここに書かれていることが客観的真相であることとよく知っている。新生児の脳の重さは三五〇グラム。三歳で三倍の九〇〇グラム。八歳で一〇〇〇グラム。この急激な脳の発達過程がいかに大切なのだ。

聴覚が、どれほど精妙なメカニズムで知のベースになっているかど読んでびっくりする。蝸牛の毛細胞一本がマイクロホン一本に相当するので、その一本が欠けただけで特定周波数が聞けなくなる。内耳の中に電気ウナギの発電組織と同じ発電メカがあり、それが壊れると突発性難聴になる。

×月×日

長崎に行つて、軍艦島を見学してきた。なんとも面白い経験だったが、帰つてから本屋で見つけた大橋弘

『1972 青春 軍艦島』

(新宿書房 2300円+税)

が実に魅力的。著者は写真学校を卒業したあと、カメラをぶら下げ中古のスーパークラブで旅に出る。流れ流れて行きついた長崎で金を使い果たし、「前金二〇〇〇円と一日五〇〇〇円」の張り紙にひかれて軍艦島に渡る。荷物かたぎりの人足生活を半年間。その間に撮った一〇〇〇カットの写真と生活記録で作ったのがこの本。写真も文章も実にいい。軍艦島の現地では見えてこなかった、あの島が生きて存在していた時代が見事によみがえってくる。最

後に補足として付け加えられた三十七年ぶりの再訪記とカラー写真がまたよい。

×月×日

レイチェル・P・メインズ『ヴァイブレーターの文化史』(論創社 3200円+税)

は、タイトルが適切でない。原題は「オーガズムのテクノロジー」であり、副題が「ヒステリア、ヴァイブレーター、そして女性の性的満足」である。中身もその通りの内容である。たしかにヴァイブレイターについて書かれて



『ヴァイブレーターの文化史』

ターについても書かれているが、それは内容の一部でしかない。訳者はヒステリアに「子宮性的興奮状態」なる訳語をあてているが、これも適切とは思えない。

ヴァイブレーターそのものは十九世紀の終わりに医療器具として生まれたものだが、女性の性感不全から生まれる神経不全症は遠く古代ギリシア時代からあった。そこでさまざまなテクノロジー(手指での内陰部外陰部のなでさすりから水浴による刺激、性具まで含む)を紹介してオーガズムを与え、女性の失われた神経と精神のバランスを回復してやるという試みもやはり、古代からあった。この書はそのすべての歴史について書かれた実に情報量豊

たしばなかし 1940年長崎県生まれ。『宇宙からの帰還』『サル学の現在』『滅びゆく国家』『ぼくらの頭脳の鍛え方』(佐藤優氏との共著)ほか著書多。

2010 4.22 130

かな本である。それを『ヴァイブレーター』の文化史』などとしてしまうのはひどい歪曲としかいいようがない。それはさまざまのテクノロジーの歴史であるとともに、それぞれの時代において、女性の性的欲求が社会からどう見られていたかという歴史でもある。そこがまた面白いのだが、『ヴァイブレーター』の文化史』では、その面白さも全部吹きとんでしまう。

×月×日

佐藤健寿『奇界遺産』

(エクストラレヅジ 3800円+税)は、まことに奇妙奇天烈な本。目次を見ると、「奇態」「奇矯」「奇傑」「奇物」「奇習」「奇怪」六つの章からなり、どのページを開いても、そのタイトル通りの奇妙奇天烈なものが出てくる。イースター島やナスカのように人によく知られたものも多少はあるが、大半は人がよく知らないものばかり。ために、本屋でパラパラとめくってみられよ。「ウヘー」とか、「なんじゃこれは」とか、

つつい驚きの声次々に口をついて出るはず。

著者は「美術大学を出て写真の仕事などをしながら、世間的にはオカルト研究家という、よくわからない人生を送ってきた」人。

それだけに、アメリカ・ニューメキシコの異星人墜落の町「ロズウェル」のUFO博物館とか、ネバダ州のエリア51といったいわくつきのもも出てくるが、素人が作った奇怪としかいようがない100%の人工物、ピュアな自然物(ただけど奇怪)、文化人類学的真実そのものなど、とにかくいろいろな奇妙としかいようのないものが同居しているところが面白い。この世界に散らばる奇妙なものを集めているうちに、「この世界の奇妙さそのもの」を描くことになってしまったという著者の述懐になるほど

と思う。

×月×日

マシュー・セリグマン+ジョン・ダヴィンソン+ジョン・マクドナルド『写真で見ると日常』(原書房 3800円+税)は、実に写真が魅力的な書だ。これまでナチス時代の写真は少なからず見てきたつもりだが、「この写真は前にも見たぞ」と思うのはごくわずかしかな

い。これだけの写真がどこに眠っていたのかと思う。写真の持つ時代の証言力の強さというものを如実に感じさせる。写真を見ているうちに、ヒトラーとナチスがなぜ権力の座につけたのが自然にわかってくるような気がしてくる。文章も歴史分析も悪くないのだが、本書の魅力は何よりも写真の持つ表現力によるところが大きい。これらの写真の来歴とこの本のメーキング・オブが読みたかった。

×月×日

ヤコブ・ペーメというの

は不思議な人物である。十



『奇界遺産』

六世紀後半、ドイツの小村で貧しい両親から生まれた靴職人でありながら、ドイツで最も著名な神秘思想家となった。神の手で触れられたという神秘体験を持ったといい、「お前は神の中に存在し、神はお前の中に存在する」「お前がきよらかに生きるなら、お前自らが神なのだ」などと語ったとされ、それゆえに、ルター派の首席牧師から名指しで「異端者」呼ばわりをされたりした。一方で、ヘーゲルが、その独特な弁証法をさして「ドイツ最初の哲学者」と大評価した。フォイエルバッハやマルクスなども高い評価を与えている。このヤコブ・ペーメを長年研究して書かれた岡部雄三『ヤコブ・ペーメと神智学の展開』(岩波書店 7800円+税)も不思議な本で、これまでにない独特のキリスト教論を展開している。キリスト教は基本的に男性神を原理とする宗教だが、後期ユダヤ教から女性的神格として、「神の智ソフィア」が崇拜されるようになった。それによると、

ソフィアは宇宙創造以前から存在し、神が世界を創造するときに神はソフィアを見ながらそこからアイデアを引き出して宇宙を作ったという。天地創造後、ソフィアは地上に遍在し、人間を救う女性神として人間の内面に住むようになった。そして人間にたえず内密の呼びかけを行う存在となった。もっぱら聖母マリアを崇拜する西方キリスト教はソフィアを軽視したが、東方教会はマリア以上にソフィアを崇拜したから、ソフィアにささげられた大聖堂が沢山ある。あの有名なイスタンブール(かつてのコンスタンチノープリス)の「聖ソフィア大聖堂」もその一つなのだ。なぜあの大聖堂がハギア・ソフィアと呼ばれるのかわからなかったが、これが本当の由来なのだ。東方教会では、ソフィアは「神の花嫁」と呼ばれているという。ヤコブ・ペーメは、人間(アダム)の墮落はソフィアを失ってエバを得たところからはじまったのだから、エバを捨て、ソフィアの再来を願えと説いた。

『私の読書日記』は、立花隆、池澤夏樹、山崎努、酒井順子、鹿島茂の五氏が毎週交代で執筆いたします。

『ぼくらの血となり肉となった五〇〇冊』として、この連載の五十回分も収録されています(一〇〇冊)(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています